

ディベート導入時の中学1年生への指導

「中学生の携帯電話」ディベート判定シートの記述

《コメント》

◇ 司会者へ

声ははっきりしていてとてもいい。進め方が上手でした。

◇ 「肯定」側チームへ

立論の内容が分かりやすい。尋問のとき、積極的に手を挙げていてすごい。最終弁論のとき、声もはっきりしていて、内容もすごく大事なことがはっきりでいい。

◇ 「否定」側チームへ

立論の内容がすごく考えられていた。尋問のときの質問や質問の答えを言うのが強い。最終弁論の内容がすごくよく、分かりやすいし、はっきりしていて、大切なところを強調していて聞きやすい。

◇ 感想

3回ディベートをやったうち、このディベートだけ、どこかちがうと分かった。〇〇さんがグラフを見て質問をしたということは、今回が初めてでした。このディベートは一番すごく熱く燃えてディベートをやっているすごいと思った。

◇ ベスト・ディベーター選考理由

ちゃんとインターネットで調べてきて、チームが勝つようにと思って調べたんだと思う。そのことがいい。

ディベート導入時の中学1年生への指導

今回は、生徒にとって身近な話題からテーマを設定し、基本的なディベートの型にしたがって学習を進めました。「手紙とメール」「都会と田舎」「制服と私服」「動物園と水族館」「海と山」「男と女」「マンガとアニメ」「夏と冬」いずれも、自分たちの生活経験の中からでも論を組み立て、展開していくことが可能な論題です。

しかし、生徒たちは、それだけでは不十分であることに気づき、アンケートをとったり、提示資料を作成したりすることで、ディベート・マッチでの勝利に向けて準備を進めていきました。

また、「中学生は携帯電話をもってもよいか」のディベートになると、自分たちの経験からくる考えだけでなく、親の立場からの考え、世の中の状況にまで思いを巡らし、論を組み立てていました。中には、授業の時間以外で、自主的にインターネットを使ってデータを集めてくる生徒もいました。この中学生の携帯電話に関わるディベートによって、ディベートの本当のおもしろさに気づくことができたのかもしれない。

中学1年生では、まずはディベートそのものを教えるために、前記論題のようなもので型を習得させ、可能であれば、携帯電話のように自分たちで調べたりしながら考えを広められる論題を取り扱えばいいのではないのでしょうか。

これらを土台として、中学2年生、3年生では、調べたり、自分たちで話し合ったりしながら準備を進め、ディベートでの討論を通して、考えを広めたり深めたりできる論題を扱うようにすれば段階を踏みながら生徒に力をつけられると考えます。